

ウサギのうさみちゃん

社会福祉法人境暁会 きらり保育園（兵庫県神戸市）

[5歳児]

うさみちゃんとの出会い

- ・2年前、近くの幼稚園から二匹のウサギをもらった。当時3歳児だった子どもたちは、「触るのは少し怖い」という様子で見つめていた。また、4歳児や5歳児が、世話をしているのを羨ましそうに見て、自分たちが5歳児クラスになったら「ウサギ小屋のお掃除ができる！」と憧れと期待感を抱いていた。そして5歳児（ぶどう組）になり、待ちに待ったウサギの世話を張り切って行っていた。

うさみちゃんとの別れ

- ・ある日、死んで動かないうさみちゃんを発見する。
- ・遊戯室にみんなが集まり、丸く座った子どもたちの真ん中に、うさみちゃんを運んだ。5歳児（ぶどう組）の子どもたちは、みんな真剣な表情を見せていた。
- ・保育者が話を始めたが、悲しみが込み上げ泣いてしまう。3歳児・4歳児の子どもは口々に「先生、泣いた」「なんで泣いてるん？」「うさみちゃんが死んだからやん」などと言う。
- ・ぶどう組の子どもたちの表情は固く、保育者が「昨日は（様子は）どうだった？」と聞くと、小屋の掃除をしていたA児はすかさず「元気やった！」と答える。「なんで死んだんやろ？」という問い掛けには、口々に「暑かったからちゃう？」「病気やったんちゃう？」などと言っていた。
- ・「ゆきちゃんが一人ぼっちになったね」と保育者が言うと、3歳児・4歳児からは「ぼくがお兄ちゃんになったる！」「お母さんになる！」などの声が上がった。5歳児の子どもたちは言葉なく、話をしている保育者の顔をじっと見つめ、今にも泣きそうだった。
- ・うさみちゃんを箱に入れる前に、保育者が「うさみちゃんが寂しくないように最後に撫でてあげて」と言うのと、無言で撫で始める子どもたち。しかし、撫でた後、次々と声をあげて大泣きし始めた。そして、ぶどう組ほぼ全員の子どもがうさみちゃんの死を悲しみ泣いていた。



- ・涙も止まり落ち着くと、子どもたちが、うさみちゃんが寂しくないように、絵を描いたり、手紙を書いたり、ウサギの折り紙を折ったりして箱に入れた。子どもたちから、いつまでもうさみちゃんを忘れないように、残されたもう一匹のゆきちゃんが寂しくないように、うさみちゃんのちぎり絵を製作した。

命との触れ合いを振りかえって

- ・1歳児の時から、多くの大人の丁寧な関わりの中で、命を大切に守られ、他児との関わり方を知ることを基本とし、まずは担任との関係を十分に築いてきた。また、乳児保育室でも小動物を飼うなど、生き物と出会える環境を作ってきた。3歳児からは動植物の飼育栽培、異年齢交流、高齢者との交流などを通し、生活や遊びの中で、自分の命と他者の命の存在を気づかせ大切にする気持ちを芽生えさせ、年齢に沿って徐々に心が育つようにと考えてきた。
- ・4歳児の時の「カブトムシとの関わり」の中では、子どもたちはカブトムシの“死”を目の当たりにし、死んだら生き返らない、ということを知った。そこでは子どもたちなりに“命の尊さ”に気付いていく姿と、疑問に思い自分なりに答えを出したり保育者や友だちと共に考えたりする姿が見られていた。

[考察]

うさみちゃんとの別れを通して、こんなにも悲しみの感情を表した。これは、うさみちゃんとのかかわりの深さとともに、1歳児から多様な経験を積み重ねたことによって、人の気持ちや小動物へのいたわりの気持ちが育まれていったからだと思われる。

みどころ

生き物との別れの場面を通して、ウサギとの深い関わりの中で生き物に親しみ、命を大切にするなど「科学する心」が育まれてきたことを捉えることが出来ます。保育者も共に関わり、子どもたちの思いを受け止め大切にしています。そして、5歳児がそこまで育ってきた過程を振り返り、命への思いが育まれる要因をとらえています。1歳児からの記録がされていることで、子どもたちの体験の積み重ねと成長を振り返ることができています。